

きょうだい構成と青年期の問題行動

長濱裕佳・村田由紀子・守谷真美

(東北大学教育学部)

1. 問題の所在と本論の目的

青年期の問題行動の原因は、本人の性格、それをとりまく家庭環境、友人、学校等、様々な要因が関連していると考えられるが、「親の意識に関する世論調査」(総理府)では、青少年の問題行動の原因は「主に家庭」と答えた青少年の親が最も多かった。

早川・依田(1983)によると、成長過程における基本的な人間関係として考えられるのは、親子関係、きょうだい関係、友人関係であり、親子関係でタテの関係が形成され、友人関係でヨコの関係が形成されるが、きょうだい関係はその両方の側面を持つ関係であり、家庭内で多種の人間関係を経験することは、人間形成に大きく影響するといえる。吉田(1987)も、競争や協同は、社会生活を送る上で不可欠な人間関係であり、これをきょうだい関係の中で経験していくことは重要だと述べている。

高橋(2009)は調査により、きょうだいのある子の方が、社会的スキルの獲得において有利であることを明らかにした。では、きょうだい関係と問題行動の関連もあるのだろうか。

きょうだいと非行との関係についての今井(1965)の調査では、中間子は最も非行率が低く、長子、末っ子、一人っ子は非行率が高かった。そのことについて今井は、「長男が『家』の相続者として特別な態度をもって養育された旧家族制度的な家族関係を、なお実質的に遺している長男優位のわが国で、長男の非行率がより高いということは、また親の直接統制に関して有利であると考えられる末っ子或は一人っ子に非行率がより高いということは、こうした出生順位にある子供に対するわが国の親の特別な態度が、子供の性格—行動をスポイルしていることと関連があると思われる。」(今井 1965,p52-53)と指摘している。また、きょうだい数に関しては、中規模の兄弟数(3～6人)の家庭では非行率は最も低く、少数兄弟(1～2人)、多数兄弟(7人以上)家庭では、子供の非行率は高くなっているとしている。

この調査から 40 年以上経過した現在、家族形態も変化した。きょうだい数は、2人きょうだいが半数以上を占めている。現在もきょうだい構成は、青年期の問題行動に影響を与えているのだろうか。

きょうだい数は、以下の表のように変化しており、平成13年度の国民生活白書によると1970年頃以降は現在までそれほど変化はなかった。

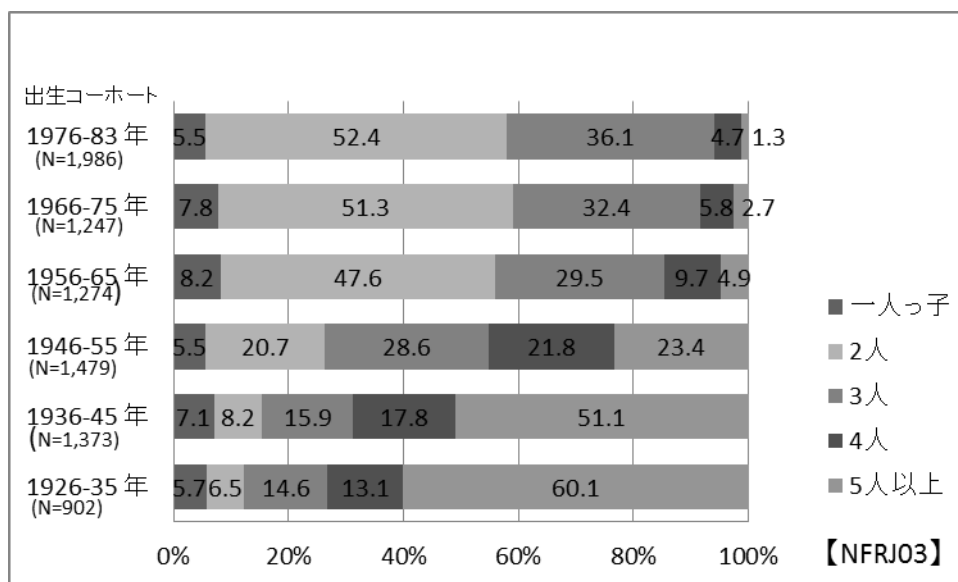


図1 コーホート別のきょうだい数の分布（保田, 2008 をもとに作成）

2. 仮説

ここでは、問題行動を反社会的問題行動と非社会的問題行動に分類して考える。

- 反社会的問題行動：「個人の内的な反社会性によって動機づけられた反規範的な行動」（宗内 1992,p57）であり，犯罪行為から虞犯行為や非行，不良行為が該当する。
- 非社会的問題行動：他人との社会的接触に消極的，回避的な性質の行動で，例えば無気力や，登校拒否，対人関係拒否，寡黙，強い内気，ひきこもりが当てはまる。原野(1992)によると，非社会的問題行動は，非社会的性格から起こる可能性が非常に高い。

このような分類をしたのは，刑法に触れるか，軽度・重度な問題行動なのかでなく，問題行動を心理的な面から捉えようと考えたからである。

(1) 浜崎・依田(1985)は，きょうだい構成(きょうだい数，出生順位，性別)によって性格

特性が違っていると報告している。

吉田(1987)によると、一人っ子は、親が過干渉や過保護になりやすいため、子どもが神経質で依頼心の強い子に育ちやすい。家庭集団内でタテの人間関係しか経験できず、同年齢の子どもの集団の中へ入ったときヨコの人間関係にうまく移行できないことがある。そのため、利己的、協調性の欠如、依頼心が強い、情緒不安定、早熟という傾向がある。

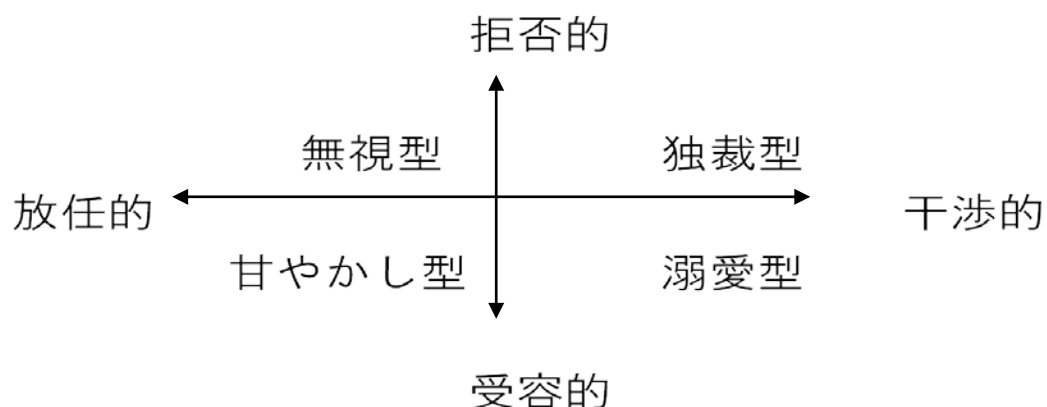
この一人っ子の性格特性は非社会的問題行動と類似している。そこで以下の仮説を立てた。

【仮説1】「一人っ子の方が、きょうだいがいる人と比較して非社会的問題行動が多い。」

(2) 吉田(1991)や浜崎・依田(1985)の論文で長子的性格や末子的性格などが指摘されているが、その要因は他のきょうだいとの関わりや、親の養育態度が出生順位によって異なるからとされている。

そこで親の養育態度がきょうだい間で異なるのならば、問題行動を起こしやすい性格を形成するような養育態度があるのではないかと考えた。

Symonds(1939)は、子どもからみた親の養育態度を次のように分類した。中心が理想的な親の養育態度であり、問題行動(盗み、反抗、虚言、家出等)を起こした子どもの親の養育態度は、無視型・独裁型(拒否的)の場合が多かったと報告されている。



(片岡・戸田, 1994をもとに作成)

図2 養育態度の分類

また吉田(1991)は、長子は、親が次子の手本となるような役割や、早く成長して次子の世話をするような大人としての役割を期待されると述べている。高橋(2009)は、Lasko(1954)

や Machole(1995)の研究で、親は長子に対して次子よりあたたかみが少なく、制限的・威圧的であり、親の差別的な扱いに長子の方が敏感であることが明らかになったと述べている。

そこで私たちは、長子は、親からの期待を負いやすく、年少のきょうだいと比べて親からのあたたかみを感じにくく、親の養育態度はサイモンズの分類で考えると、拒否的(無視型・独裁型)と受け取られるのではないかと考えた。

以上をまとめると、

- ① 問題行動を起こした子どもの親の養育態度は、拒否的であることが多かった。
- ② 長子は他のきょうだいよりも親の愛情を感じにくいので、親の自分への養育態度を拒否的だと感じる。

となる。そこで以下の仮説を立てた。

【仮説2】「長子の方が、長子以外と比較して反社会的問題行動が多い。」

3. データと変数

3. 1. データ

本調査は、「若年者のライフスタイルと意識に関する調査」として、東北大学教育学部、山形大学地域教育文化学部を主体に 2011 年 7 月に実施された。調査対象者は、20-39 歳の非学生の男女、実査方法は、web 調査と郵送調査である。また、計画サンプルサイズは 500 で、有効回収数は 447（回収率 89.3%）であった。

3. 2. 変数

分析に用いた変数は、下記のとおりである。

○両親の養育態度についての質問（問 32）

- | | | |
|------------------------|---|--------------|
| a.私に対して温かかった | } | 「受容－拒否」を判定する |
| b.私の気持ちを分かろうとしていた | | |
| c.何かにつけて私の行動に口をはさんだ | } | 「干渉－放任」を判定する |
| d.何かにつけて私に考えを押し付けようとした | | |

この問 32 の各項目において、回答者には「よくあてはまる」「まああてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の 4 件法で父母それぞれについて回答してもら

っている。そこで、「よくあてはまる」「まああてはまる」に○を付けた者を「あてはまる」とし、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」に○を付けた者を「あてはまらない」とした。そしてその結果を、サイモンズの養育態度尺度をもとに作成された東京都生活文化局(1982)のアンケートに従い、親の養育態度を下記の 4 種類に分類した。(父母それぞれについて)

- ・「独裁型」:「c と d の両方に該当」し、「a と b どちらにも該当しない」または、「a と b のどちらかのみ該当する」場合.
- ・「無視型」:「a と b どちらにも該当しない」または、「a と b のどちらかのみ該当する」かつ「c と d どちらにも該当しない」または、「c と d のどちらかのみ該当する場合.
- ・「甘やかし型」:「a と b の両方に該当」し、「c と d どちらにも該当しない」または、「c と d のどちらかのみ該当する」場合.
- ・「溺愛型」: a.b.c.d すべてに該当する場合

○反社会的問題行動についての質問

- ・授業をさぼった
- ・いじめをした
- ・校則をよくやぶった
- ・家出をしたことがあった
- ・イライラすると物にあたった

上記の反社会的問題行動に関する質問 5 項目について、中学校時と高校時それぞれ回答してもらった。(当てはまるものをすべて選択)

○非社会的問題行動についての質問

- ・他人と関わらず、家または部屋に閉じこもっていた

- ・他人に対して恐怖心を持っていた
- ・学校にあまり行きたくなかった
- ・かなり引っ込み思案だった
- ・自分のことが嫌いだった
- ・他人と関わるのが嫌だった

上記の非社会的問題行動に関する質問 6 項目について、中学校時と高校時それぞれ回答してもらった。(当てはまるものをすべて選択)

4. 分析結果

4. 1. 主要変数の分布

きょうだい数、きょうだい位置、反社会的問題行動の該当数、非社会的問題行動の該当数の分布を以下に示す。

表 1 きょうだい数の分布

きょうだい数	人数
0 人 (1 人っ子)	42 人(9.4%)
1 人 (2 人きょうだい)	256 人(57.3%)
2 人 (3 人きょうだい)	120 人(26.8%)
3 人以上 (4 人以上きょうだい)	29 人(6.5%)

表 2 きょうだい位置の分布

きょうだい位置	人数
一人っ子	42 人(9.4%)
長子	204 人(45.6%)
中間子	51 人(11.4%)
末子	150 人(39.6%)

表 3 反社会的問題行動の分布

該当数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	計
人数	224	70	67	29	34	11	8	2	2	447
%	50.1%	15.7%	15.0%	6.5%	7.6%	2.5%	1.8%	0.5%	0.5%	100.0%

表 4 非社会的問題行動の分布

該当数	0	1	2	3	4	5	6	7	8~	計
人数	174	67	67	30	28	20	28	9	24	447
%	38.9%	15.0%	15.0%	6.7%	6.3%	4.5%	6.3%	2.0%	5.4%	100.0%

○【仮説 1】「1 人っ子の方が、きょうだいがいる人と比較して非社会的問題行動が多い」について

きょうだい数を独立変数、非社会的問題行動の該当数を従属変数として分散分析を行った。

表 5 きょうだい数と非社会的問題行動の分散分析

	平方和	自由度	平方平均	F 値
グループ間	11.089	3	3.696	.528
グループ内	3103.869	443	7.006	
合計	3114.957	446		

(注) **p<.01, *p<.05.

表 5 より、きょうだい数と非社会的問題行動には関連が無い。よって 1 人っ子に非社会的問題行動が多いとは言えず、仮説 1 は支持されない。

○【仮説 2】「長子の方が、長子以外と比較して反社会的問題行動が多い」について

きょうだい位置を独立変数、反社会的問題行動の該当数を従属変数として分散分析を行った。

表 6 きょうだい位置と反社会的問題行動の分散分析

	平方和	自由度	平方平均	F 値
グループ間	1.586	3	.529	.191
グループ内	1228.848	443	2.774	
合計	1230.434	446		

(注) ** $p < .01$, * $p < .05$.

表 6 より、きょうだい位置と反社会的問題行動には関連が無い。よって長子に反社会的問題行動が多いとは言えず、仮説 2 は支持されない。

なお、きょうだい数と非社会的問題行動、きょうだい位置と反社会的問題行動についても同様に分散分析を行ったが、関連は見られなかった。

○【仮説 1】の根拠となった「1 人っ子は親が過干渉・過保護になりやすい」、【仮説 2】の根拠となった「出生順位によって親の子どもへの接し方が異なる」について

きょうだい構成と問題行動との関連について、きょうだい数、きょうだい位置のそれぞれを独立変数、父親の養育態度、母親の養育態度のそれぞれを従属変数としてカイ 2 乗検定を行った。

表 7～10 より、きょうだい構成と親の養育態度には関連が無い。よって、出生順位やきょうだい数によって親の子どもへの接し方が変わるとは言えない。

以上より、きょうだい構成は、問題行動とも、親の養育態度とも関連が無いことがわかった。

表7 きょうだい数と父親の養育態度のクロス集計表

		養育態度				計
		独裁型	無視型	甘やかし型	溺愛型	
きょうだい数	1 人っ 子	6 14.3%	18 42.9%	16 38.1%	2 4.8%	42 100.0%
	2 人	35 13.7%	93 36.5%	110 43.1%	17 6.7%	255 100.0%
	3 人	21 18.1%	36 31.0%	55 47.4%	4 3.4%	116 100.0%
	4 人以 上	5 17.2%	14 48.3%	10 34.5%	0 .0%	23 100.0%
計		67 15.2%	161 36.4%	191 43.2%	23 5.2%	442 100.0%

カイ 2 乗値(自由度)=8.135(9), $p>.10$

表8 きょうだい数と母親の養育態度のクロス集計表

		養育態度				計
		独裁型	無視型	甘やかし 型	溺愛型	
きょうだい数	1 人っ 子	5 12.2%	7 17.1%	21 51.2%	8 19.5%	41 100.0%
	2 人	38 14.8%	24 9.4%	143 55.9%	51 19.9%	256 100.0%
	3 人	17 14.2%	14 11.7%	69 57.5%	20 16.7%	120 100.0%
	4 人以 上	5 17.2%	2 6.9%	17 58.6%	5 17.2%	29 100.0%
計		65 14.6%	47 10.5%	250 56.1%	84 18.8%	446 100.0%

カイ 2 乗値(自由度)=3.588(9), $p>.10$

表 9 きょうだい位置と父親の養育態度のクロス集計表

		養育態度				計
		独裁型	無視型	甘やかし型	溺愛型	
きょうだい位置	1 人っ子	6 14.3%	18 42.9%	16 38.1%	2 4.8%	42 100.0%
	長子	33 16.5%	71 35.5%	81 40.5%	15 7.5%	200 100.0%
	中間子	11 21.6%	19 37.3%	20 39.2%	1 2.0%	51 100.0%
	末子	17 11.4%	53 35.6%	74 49.7%	5 3.4	149 100.0%
計		67 15.2%	161 36.4%	191 43.2%	23 5.2%	442 100.0%

カイ 2 乗値(自由度)=9.856(9), $p>.10$

表 10 きょうだい位置と母親の養育態度のクロス集計表

		養育態度				計
		独裁型	無視型	甘やかし型	溺愛型	
きょうだい位置	1 人っ子	5 12.2%	7 17.1%	21 51.2%	8 19.5%	41 100.0%
	長子	32 15.7%	25 12.3%	111 54.4%	36 17.6%	204 100.0%
	中間子	10 19.6%	5 9.8%	26 51.0%	10 19.6%	51 100.0%
	末子	18 12.0%	10 6.7%	92 61.3%	30 20.0%	150 100.0%
計		65 14.6%	47 10.5%	250 56.1%	84 18.8%	446 100.0%

カイ 2 乗値(自由度)=7.829(9), $p>.10$

ここから、問題行動と親の養育態度の関連について見てみる。

養育態度を独立変数、問題行動の該当数を従属変数として4つの分散分析を行った。

表 1 1 父親の養育態度と反社会的問題行動の分散分析

	平方和	自由度	平方平均	F値
グループ間	12.048	3	4.016	1.457
グループ内	1207.572	438	2.757	
合計	1219.620	441		

(注) ** $p < .01$, * $p < .05$.

表 1 2 父親の養育態度と非社会的問題行動の分散分析

	平方和	自由度	平方平均	F値
グループ間	124.373	3	41.458	6.314**
グループ内	2875.784	438	6.314	
合計	30000.156	441		

(注) ** $p < .01$, * $p < .05$.

表 1 3 母親の養育態度と反社会的問題行動の分散分析

	平方和	自由度	平方平均	F値
グループ間	29.885	3	9.962	3.672**
グループ内	1198.976	442	2.713	
合計	1228.861	445		

(注) ** $p < .01$, * $p < .05$.

表 1 4 母親の養育態度と非社会的問題行動の分散分析

	平方和	自由度	平方平均	F値
グループ間	106.617	3	35.539	5.222**
グループ内	3008.318	442	6.806	
合計	3114.935	445		

(注) ** $p < .01$, * $p < .05$.

表 1 1 ～ 1 4 より，非社会的問題行動と父親の養育態度，反社会的問題行動と母親の養育態度，非社会的問題行動と母親の養育態度には関連があると言える．親の養育態度による問題行動の該当数の平均値の違いは以下の通りである．

表 1 5 父親の養育態度と反社会的問題行動該当数の平均値

養育態度	平均値
独裁型	1.5373
無視型	1.2981
甘やかし型	1.0890
溺愛型	1.4783
計	1.2534

表 1 6 父親の養育態度と非社会的問題行動該当数の平均値

養育態度	平均値
独裁型	2.8060
無視型	2.5093
甘やかし型	1.5288
溺愛型	2.3913
計	2.1244

表 1 7 母親の養育態度と反社会的問題行動該当数の平均値

養育態度	平均値
独裁型	1.7385
無視型	1.4255
甘やかし型	1.0440
溺愛型	1.4167
計	1.2556

表 18 母親の養育態度と非社会的問題行動該当数の平均値

養育態度	平均値
独裁型	2.9692
無視型	2.6383
甘やかし型	1.7360
溺愛型	2.4762
計	2.1502

親の養育態度ごとの平均値を比較してみると、関連の見られなかった父親の養育態度と反社会的問題行動の関係を除き、親の養育態度と問題行動の間には、親の養育態度が甘やかし型の子どもは問題行動が少なく、独裁型には問題行動が多いという傾向が見られた。

これより、青年期の問題行動は、親の養育態度とは関連があるものの、きょうだい構成とは関連が無いということがわかった。また、教育態度と親の養育態度の関連も見られなかったことから、きょうだい構成は、青年期の問題行動には、親の養育態度を介しても関連していないと言える。

5. 結論

本調査は、現在においても、きょうだい構成が青年期の問題行動に影響を与えているかを明らかにすべくおこなったのだが、分析の結果、きょうだい位置やきょうだい数といったものが、問題行動に直接関係していないことに加えて、きょうだい位置やきょうだい数による、親の養育態度の違いも見られないことが明らかになった。

また、今回の調査では、親の養育態度と問題行動の関係を見出すことが出来た。分散分析の結果を見ると、全体的な傾向として、親の養育態度が甘やかし型の場合に、非社会的問題行動、反社会的問題行動ともに相対的に少なく、親の養育態度が独裁型の場合に、非社会的問題行動、反社会的問題行動ともに相対的に多くなっていることが分かる。笠井・岡田(2009)において、拒否的、干渉的な態度で養育された子どもは、自己否定的な感情を持ち、そのことへの怒りを他者や自分自身に向けやすく、問題行動につながるがあると指摘されていることから、独裁という拒否的、干渉的な態度で養育された子どもにおいて、問題行動が多く、独裁とは対極にある、甘やかすという受容的、放任的な態度で養育

された子どもにおいて、問題行動が少ないとの結果が出たと考えられる。

さらに、玉井(2000)においても、親や家族の子どもへのかかわり方が問題行動に及ぼす影響について述べられており、影山(2000)では、特に、親が適切な役割を果たすことが、子どもの問題行動を防ぐ上で重要であって、親が十分な役割を果たせていなくても、かつての日本においては、祖父母やきょうだいがその不十分な部分を埋める役割を果たしていたと指摘されている。今回の結果や、冒頭に示したきょうだい数の推移のグラフを見てもわかるように、現在は以前と比較して、きょうだい数が減少し、さらに核家族化も進行している。厚生労働省の国民生活基礎調査によると、ここ 40 年ほどの間に、核家族世帯数は約 1.7 倍になっている。それらのことから考えても、今の日本において、親が果たす役割、そして養育態度というものが子どもの問題行動に与える影響は、今後ますます重要なものになっていくとすることが出来るのではないだろうか。

参考文献

- 浜崎信行・依田明, 1985, 「出生順位と性格(2) —— 3人きょうだいの場合」『横浜国立大学教育紀要』25: 187-196.
- 原野広太郎, 1992, 「子どもの問題行動」原野広太郎編『新・児童心理学講座 第16巻——子どもの問題行動と心理療法』金子書房, 1-22.
- 早川孝子・依田明, 1983, 「ふたりきょうだいにおけるきょうだい関係」『横浜国立大学紀要』23: 81-91.
- 今井光映, 1962, 「<保健体育科学>家族関係と少年非行——家庭の構成関係的接近」『家政学紀要』2: 49-56.
- 影山任佐, 2000, 「のび太症候群」『超のび太症候群』河出書房新社, 17-53.
- 笠井達夫・岡田涼子, 2009, 「親の養育態度と青年の攻撃性との関係」『徳島文理大学研究紀要』78: 95-108.
- 片山美由紀・戸田弘二, 「対人関係」堀洋道他編, 1994, 『心理尺度ファイル—人間と社会を計る—』垣内出版, 350-399.
- 厚生労働省, 2010, 「平成 21 年国民生活基礎調査の概要」, 厚生労働省ホームページ, (2011 年 9 月 9 日取得, <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa09/1-1.html>).
- 宗内敦, 1992, 「問題行動」原野広太郎編『新・児童心理学講座 第16巻——子どもの問題

- 行動と心理療法』金子書房, 55-85.
- 内閣府, 2002, 「親の意識に関する世論調査」, 内閣府ホームページ (2011 年 9 月 9 日取得, <http://www8.cao.go.jp/survey/h03/H04-01-03-17.html>).
- 内閣府, 2011, 「平成 13 年度国民生活白書」, 内閣府ホームページ (2011 年 9 月 23 日取得, <http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/wp-pl01/html/13102100.html>).
- Percival M. Symonds, 1939, *The Psychology of Parent-Child Relationships*, APPLETON-CENTURY-CROFTS, INC, 141-147.
- 高橋江梨子, 2009, 「児童の対人認知と社会的スキルに関する研究—きょうだいのある子とひとりっ子の比較を中心に—」『創価大学大学院紀要』 31: 215-240
- 玉井正明・玉井康之, 2002, 「少年犯罪の社会的背景と前兆行動」『少年の凶悪犯罪・問題行動はなぜ起きるのか』ぎょうせい, 108-147.
- 保田時男, 2008, 「きょうだい内での学力達成」藤見純子・西野理子編『現代日本人の家族——NFRJ からみたその姿』有斐閣, 36-45.
- 吉田俊和, 1987, 「きょうだい関係の心理」長田雅喜編『家族関係の社会心理学』福村出版, 104-116.
- 吉田俊和, 1991, 「きょうだい関係」松田惺編『新・児童心理学講座 第 12 巻——家族関係と子ども』金子書房, 107-136.